がたのしき、とよめるもおなじ、本草綱目喬木類に載せたる梓是なり、此木冬は葉落ちて、春新葉を生ず、大三四寸、形三尖にして、細鋸齒あり、嫩葉は全く赤くして藜に似たり、長じて青色に變ず、故に赤芽柏の名あり、夏の頃枝の末毎に花を發く、黄白色叢生して傘を張る、花後小實を結ぶ、大さ南天燭子のごとく軟刺あり、初青く後茶褐色にして枯る、其實熟すれば、四つに發けて、中の子椒目のごとく色黑し、西國にては、今も此葉を採りて、御祭葉と名づけ、神供を盛るなり、されども此をがたまの木は、古今傳授といふ事になりて、種々の說あり、一決せず、一說には門松の下に立つる木ををかたまの木といふもあり、又岡靈（オカタマ）の木といふもあり、定家卿の說に、鳥柴をいふともあり、貞德自筆の和歌寶樹には、宗祇の切紙を難じて、三箇ならで古今集の奥儀は、歌序の中に多き事なりといへり、又後奈良院享祿元年十一月十六日、古今御傳授逍遙院申さるゝと、御湯殿の記に見えたり、又外に一種日向國小戸窟の邊より出だすをがたまの木あり、是は通雅に見えたる楊桐（サカキ）の種類にて、神代に用ひたるかしはとは、大に異なるやうに覺ゆ、先年日向より予（茅原定）が門に來りし書生、一枝を贈る、寫眞しおけり、（略圖）

〔紀伊續風土記物產六下〕岡玉乃木（オカタマノキ）古今集樹大なるは丈餘、葉互生して、大さ竪三寸、幅一寸半許、本細く末濶く、鋸齒なく邊脈反る、正月の末、葉の本より小枝出て穗をなし、開花は白色、瓣莘蕚花の短小なるが如く、花中紫色あり、一花毎に實を結び、纍々（ルイ）として神樂の鈴の如く、秋深く實の皮裂て、中に赤仁三四顆づゝあり、殆海桐の實に類す、日向高千穗峯にあるヲガタマノ木は此木にあらず、前條のガウマルなり、

牟婁郡那智山、及名草郡日前宮國造家庭中、其餘人家處々に稀にあり、

〔古今和歌集十物名〕をかたまの木　ともののり

みよしの、吉野の瀧にうかびいづるあはをかたまのきゆとみつらん

〔本草和名十四木〕莽草陶景注云、字或作莽、音冈、一名旃楊玄操音已爾反、一名春草、和名之岐美乃木、

〔倭名類聚抄二十木〕莽草　山海經注云、莽草和名本草云、之木美、可以毒魚者也、

莽草